

編集後記

荒川さんが研究会当日議論されたこと / されなかったことについてまとめていますので、私は編集作業を通して改めて議論を振り返るなかで感じられたことについて記したいと思います。

今回の研究会の出色は、なんといっても心理学者の科学観（それも若干偏っている科学観）について、科学哲学者である伊勢田さんがコメントをしたことです。私が考える哲学とは、「徹底的にしつこく『考える』学問」ですので、期待通り以上のコメントでした。例えば、荒川さんが心理学の歴史および現状、それから質的研究の目指すべき方向性について意欲的な話題提供をしましたが、それに対する伊勢田さんのコメントは、まだまだ整理されていないし徹底した思考に欠けている、といったものでありました（半ば私の感想ですが）。今回の研究会では、議論の時間はそれほど長く取っていなかったため、何か共通の理解を見出すまでに至らず、また議論が粉飾するにも至らなかったため、伊勢田さんからいただいた課題は 今回こうして文章にして発刊しますので 宿題として検討してみたいと思います。

さて、思考を徹底化することについて、日々のトレーニングの違いから心理学者は哲学者（しかもとびっきり優秀な哲学者）に敵いません。じゃあ質的研究と科学との関係について議論する際、心理学者ゆえの役割はないのかと考えると、2点ほど役割があるのではないかと思います。

1点目は、荒川さんやサトウさんが進めている心理学史研究です。心理学がどのような変遷を辿ってきたのか、その歴史を吟味しつつ学ぶべきことはあるように思います。今回サトウさんは従来言われてきた「ヴント - 実験室が心理学創始説」とは異なる学説の紹介から始まり、カントの「不可能宣言」、ゲーテの『色彩論』へと広がっていく話はなんともしりリングでした（当日は理解できていませんでしたが）。心理学史も徹底すれば、心理学ゆえの質的研究と科学の関係を構想できるのではないかと強く思いました。実は以前から

思っていることなのですが・・・。

2点目は、村上さんや私が進めている具体的な事象をとらえようと、しつこく徹底的に付き合い続けることです。例えば、村上さんの研究話を聞いて久しいですが　ここから村上さんの話をしますが、これは同時に私自身に向けた話です　私は村上さんの研究を半分も分かっていないと思います。これは、「ツキ」や「運」といった事象がまだまだ解明できていないという面と、村上さんが言わんとしていることを汲み尽くしていないという面の両方があるように思います。前者はいろんな方に頑張ってもらうしかありません。後者に関しては、私の理解力の乏しさだけでなく、村上さん自身明確に語る事が出来ていないことがあるように思います。ある時は「あれが大事」、またある時は「これも大事」となかなか話が収束しません。ひょっとしたら単なる整理ベタなだけかもしれません(苦笑)。しかし私が村上さんのお仕事に魅力を感じるのは、「ツキ」や「運」といった事象について簡単に答えを出してしまうのではなく　課題や方法によっては簡単に答えが出るものもありますが　自身で抱える問いに応えるためしつこく徹底的に付き合い続けていること、そこにあります。「事象を神秘化している」という批判があるかもしれません。伊勢田さんが挙げられた質的研究の先駆者である社会学におけるウェーバーに始まり、ミードやシュッツ、ブルーマー、それからガーフィンケル、それらの理論を土台に議論を進めれば村上さんのお仕事や私のやろうとしていることに懐胎されていることを説明出来るのかもしれませんが。けれども自身の抱える問いに応えるため具体的な事象にしつこく徹底的に付き合い続けること　もちろん既存の理論は視野に入れつつ　から見出し語られるその事象の面白さ・大切さは、説明とは異なる果実なのではないかと思うのです。

現時点では放言に過ぎませんが、これから具体的な実践を示していくことで心理学における質的研究、科学における(心理学独特の)質的研究の位置を構想していきたいと思いません。

最後に、第二回研究会当日は何が課題であるのか分かりにくかったのではないかと推測します。そういった点で、今回冊子化して今一度咀嚼する機会を得たことはよかったのではないかと思います。咀嚼するための料理を提供して下さった伊勢田さん、サトウさん、村上さん、荒川さん、それから参加して下さった皆さんに感謝いたします。

できればこの冊子を踏まえてもう一度議論したいですね。

いや本気で。(松本光太郎)

本企画の論点は3つあったように思われる。

第1の論点は、心理学と社会の関係であり、他の分野に比べて「しろうと理論」あるいは「素朴理論」と呼ばれるものが多い心理学において、それら科学的な検証を経ていない「しろうと理論」と心理学的研究の関わり方の問題であり、その点については村上論文が整理していた。

第2の論点は、科学とは何かという問題であり、そもそも(現状の定義での)科学は、何であるのか?(伊勢田論文)、それに基づいて、現状の科学の範疇に、どのような質的研究が入るのかを検討しようとするものであった。前者の問題について、伊勢田報告は科学と疑似科学との境界を「ある研究分野において明らかにしようとしていることについて、もっと良い研究手法が存在するのに意図的にそれを利用しないで、その結果そのもっと良い研究手法を使えば達したであろう結論と大きく食い違うような結論に達した場合、このことはその分野が疑似科学的だと見なされるべきだとする強い理由になる」と整理している。

第3の論点は、現状での科学の定義では質的研究は科学というのは難しいのなら、心理学および質的研究をどう位置づけるかという問題であり、その科学の定義そのものに変更を迫る(サトウ報告)、そして、未来予測志向性の研究として科学の定義を尊重しつつ、可能性暗示志向の知識生産として質的研究の可能性と意義を見出していく(荒川報告)、という2つの可能性が提示された。

しかし実際には、第1・第2の論点に関しては、十分精緻な議論がなされなかったと思われる。たとえば、第1の論点である非科学と心理学との関係に関していえば、どのような距離感を心理学としてとるべきかについて精緻に整理するべきであったろう。

また第2の論点である、質的研究と科学との関係に関していえば、「どのような質的研究においては、もっと良い研究手法がない(=質的研究が科学的である)といえるのか?」などについては、具体的な条件は何かなどについては、精査の余地があったといえる。

今回の議論では、伊勢田報告で提案された、境界設定の定義についての吟味事態もなされなかった。たとえば、「『もっとよい研究手法』の有無をどのように判断するのか?」「『もっと良い研究手法』の「良い」の定義は何か?」「そもそも、より良い研究手法の無いために質的研究が用いられたとして、それが量的研究と同質の意味を社会的に持ちうるのだろうか?持っていないのだろうか」などについては、科学哲学における「科学的」の定義を質的研究に生かすためにも必要なものであると考えられる。

当日のシンポジウムの総合討論では、松本氏の実践を中心に、質的研究の科学との関係

について議論された。その中ででてきた問題意識としては、質的研究の学問的な繋がり方の問題であり、いわゆる科学研究が前提とするような「真実」探求ではない場合に、どのような知識の蓄積が可能かについて議論された。この点も具体的な結論がでないまま、時間切れとなった。

ここで整理したように、課題は山積しているが、このような課題が明らかになったことは、心理学者と科学哲学者が、議論をした本企画の意義であったといえる。今後はこれらの課題に真摯に取り組み、この機会をより意義あるものにしたい。(荒川 歩)